

太初の朝

春の日の朝とも異なり

夏、秋、冬、

このような日の朝とも異なる朝に

真っ赤な花が咲き始めたんだ、

日光が青いのに、

その前日の夜に

その前日の夜に

すべてのものが用意されていたんだ、

愛は 蛇とともに

毒は 幼い花とともに。

(一九四一・五・三一)

太初의 아침

봄날 아침도 아니고

여름, 가을, 겨울,

그런날 아침도 아닌 아침에

빨간 꽃이 피어났네,

햇빛이 푸른데,

그 前날 밤에

그 前날 밤에

모든것이 마련되었네,

사랑은 뱀과 함께

毒은 어린 꽃과 함께.

tætjoe at̄sim

ponnal at̄simdo anigo  
yərüm, kaül, kyəul,  
kürənnal at̄simdo anin at̄sime

pal-gan kot̄si p̄iananne,  
hæt̄pit̄si p̄uründe,

kü t̄sənnal pame  
kü t̄sənnal pame  
mo:düŋgəsi maryən döənnə,

sarayün pæ:m gwa hamke  
toğün ərin kot̄kwa hamke.

再び 太初の朝

真っ白く雪がつもり

電信柱がワーンワーンと鳴り

主の御言葉が聞こえてくる。

なんの啓示なのか。

もうすぐ

春がくれば

罪をおかし

雪が

明るく

イブが産みの苦しみを終れば

無花果の葉で恥部をおおって

私は額に汗を流さねばならぬでしょう。

또 太初의 아침

(一九四一·五·三十一)

하얗게 눈이 덮이었고  
電信柱가 잉잉 울어

하나님 말씀이 들려온다.

무슨 啓示일까.

빨리

봄이 오면

罪를 짓고

눈이

밝아

이브가 解産하는 수고를 다하면

無花果 잎사귀로 부끄런데를 가리고

나는 이마에 땀을 흘려야겠다.

to tæ̃tjœ atsim

ha:yake nu:ni tæ̃piætko  
tjœ:nsintʃuga i:ŋiŋ uræ  
hananim ma:l̥sümi tülryæonda.

musün kye:siilka.

palri

pomi omyæn

tjœ:rul tʃitko

nu:ni

palgo

ibüga hæ:sanhanün su:gorül ta:hamyæn

muhwagwa ipsa:gwiwo pukürænderül karigo

nanün imae tamül hülryæyagetta.

一九四一·五·三十一

夜明けがくるまで

すべての死にゆく人々に  
黒い衣を着させなさい。

すべての生きゆく人々に  
白い衣を着させなさい。

そして 同じ寝台に  
静かに眠りをねむらせなさい

泣くものたち すべてに  
乳を飲ませなさい

いまに 夜明けがくれば  
ラッパの音が聞こえるでしょう。

(一九四一・五)

새벽이 올 때까지

다들 죽어가는 사람들에게

검은 옷을 입히시요.

다들 살아가는 사람들에게

흰 옷을 입히시요.

그리고 한 寢臺에

가르린히 잠을 재우시요

다들 울거들랑

젖을 먹이시요

이제 새벽이 오면

나팔소리 들려 올게외다.

Sæbyagi olækadzi

ta:dül tʃugəgahün sa:ramdürege  
kə:mün osül iphisiyo.

ta:dül sa:rəganün sa:ramdürege  
hün osül iphisiyo.

kürigo han tʃi:m dæe  
kadzürəni tʃamül tʃæusiyo

ta:dül u:lgədülraŋ  
tʃədzül məgisiyo

idze sæbyagi omyən  
napalsori tülryə olgeöda.

おそろしい時間

そこで 私を呼んでいるのは誰ですか、  
枯葉でさえ青く芽ぶく鬩りであるのに、  
私はまだここに息が残っています。

一度も手をあげてみたことのない私を  
手をあげて示すべき空もない私を

どこへ 私の躰をおく空があり  
私を呼んでいるのでしょうか。

仕事を済ませて私の逝く日の朝には  
悲しげもなく枯葉が落ちるのだろうか……

私を 呼ばないでくれ。

(一九四一・二・七)

무서운 時間

저 나를 부르는 것이 누구요,

가랑잎 잎파리 푸르러 나오는 그늘인데,

나 아직 여기 呼吸이 남아 있소.

한번도 손들어 보지 못한 나를

손들어 표할 하늘도 없는 나를

어디에 내 한몸 들 하늘이 있어

나를 부르는 것이오.

일을 마치고 내 죽는날 아침에는

서럽지도 않은 가랑잎이 떨어질텐데.....

나를 부르지마오.

musaun sigan

ka narül purününgäsi nuguyo,

karajip ippari: purüra naonün künürinde,  
na adzik yägi hohübi nama isö.

hanbando sondüra potsimo:tan narül  
sondüra pyohal hanüldo ə:pnün narül

adie næ hanmom tul hanüri isö  
narül pürunün gäsio.

i:rül matšigo næ tsugnünnał atšimenün  
sə:rəpšido anün karajipi tarədziltende.....

narül purüdzimao.



十字架

追ってきた日光だのに  
いま 教会堂のてっぺん  
十字架にひっかかりました。

尖塔があのようにも高いのに  
どうしたら登あがれるんだろうか。

鐘の音も聞こえてこないの  
口笛でも吹きながらうろついたが、

苦しんだ男、  
幸福なイエス・キリストに  
似せて  
十字架が許されるなら

小首を垂らして  
花のように咲きそめる血を  
暮れゆく空の下に  
静かに 流しましょう。

(一九四一・五・三一)

十字架

꽃아오든 햇빛인데

지금 教會堂 꼭대기

十字架에 걸리었습니다.

尖塔이 저렇게도 높은데

어떻게 올라갈수 있을까요.

鐘소리도 들려오지 않는데

휘파람이나 불며 서성거리다가,

괴로웠든 사나이,

幸福한 예수·그리스도에게

처럼

十字架가 許諾된다면

목아지를 드리우고

꽃처럼 피어나는 피를

어두어가는 하늘 밑에

조용히 흘리겠습니다.

Sip tja ga

tjo tjaodün hætpitjinde  
tjigüm kyohöday kōktægi  
siptjagæ kalriäsümnida.

tjamtabi tjarakedo nopunde  
atake olragalsu isülkayo.

tjongsorido tülryæodzi annünde  
hwiparamina pu:lyæ sæsæŋkæridaga,

körowattün sanai,  
hæ:ŋbōkan ye:su·kürisütoege  
tjaræm  
siptjagaga hæraktöndamyæn

mogadzirül türingō  
kōttjaræm pjananün pirül  
æduæganün hanül mite  
tjo yo:ŋhi hülrigesümnida.

風が吹き

風は どこから吹いて  
どこへ吹きゆこうとするのか、

風が吹いているのに  
私の苦しみには理由がない。

私の苦しみには 理由がないのだろうか、

たった一人の娘を愛したこともない。  
時代を悲しんだこともない。

風がしきりに吹いているのに  
私は盤石の上に立った。

河がしきりに流れているのに  
私は堤の上に立った。

바람이 불어

바람이 어디로부터 불어와  
어디로 불려가는 것일까,

바람이 부는데  
내 괴로움에는 理由가 없다.

내 괴로움에는 理由가 없을까,

단 한女子를 사랑한 일도 없다.

時代를 슬퍼한 일도 없다.

바람이 자꼬 부는데

내발이 반석우에 섰다.

강물이 자꼬 흐르는데

내발이 언덕우에 섰다.

parami pu:ra

parami adiropuṭa pu:rəwa  
adiro pu:lryəganun gəsilkā,

parami pu:nūnde  
næ köroumenün i:yuga ə:pta.

næ köroumenün i:yuga ə:psülkā,

tan han yədzarül sarəŋhan i:lɔ ə:pta.  
sidærül sülpəhan i:lɔ ə:pta.

parami tʃako pununde  
nəpari pansəgue sətta.

kaŋmuri tʃako hürünunde  
nəpari əndəgue sətta.

眼をとじてゆく

悲しい一族

(一九三八・六)

白い手ぬぐいが黒い頭髪をつつみ  
白いコムシンが粗い足にひっかけられる。

白いチョゴリとチマが悲しい躰をおおい  
白い帯紐が細い腰をギュッとしばる。

爪先に石があたれば  
とじた眼をパツとあけよ。

(一九三八・九)

(一九四一・五・三一)

슬픈 族屬

흰 수건이 검은 머리를 두르고

흰 고무신이 거친 발에 걸리우다.

흰 저고리 치마가 슬픈 몸집을 가리고

흰 띠가 가는 허리를 질끈 동이다.

〈一九三八·九〉

(一九三八·九)

sülpün tsöksok

hin su:gəni kə:mün mərirül tunügo  
hin komusini kətsin pare kəlriuda.

hin tsəgori tsimaga sülpün momdzibül karigo  
hin t̄iga kanün hərirül tsilkün tonjida.

眼をとじてゆく

太陽を思慕する子供たちよ  
星を愛する子供たちよ

夜が暗いのに  
眼をとじてゆけ。

持っている種子を  
撒きながらゆけ。

爪先に石があたれば  
とじた眼をパッとあけよ。

(一九四一・五・三一)

눈 감고 간다

太陽을 사모하는 아이들아  
별을 사랑하는 아이들아

밤이 어두었는데  
눈 감고 가거라.

가진바 씨앗을  
뿌리면서 가거라.

발뿌리에 돌이 채이거든  
감았던 눈을 와작 떠라.

〈一九四一·五·三十一〉

nun kango kanda

ŷæyɔ̃l samohanün aidüra  
pyɔ:rül sarayhanün aidüra

pami əduənnunde  
nun kango kagəra.

katsinba ŷiasül  
purimyansə kagəra.

palpurie to:ri ŷæigədün  
kamətün nunül watsak təra.



もうひとつの故郷

故郷に帰ってきた日の夜に  
私の白骨がついてきて 同じ部屋に横になった。

くらい部屋は宇宙へ通じて  
天空からか 声のように風が吹いてくる。

暗がりの中で きれいに風化する

白骨をうかがい見て

涙ぐむのは 私が泣くのか

白骨が泣くのか

美しい魂が泣くのか

志操の高い犬は

夜を明かして暗がり吠えている。

暗がり吠える犬は

私を追うのだらう。

ゆこう 行こう  
追われる人のように行こう

白骨に知れぬよう  
美しいもうひとつの故郷へ 行こう。

또 다른 故郷

故郷에 돌아온 날 밤에  
내 白骨이 따라와 한방에 누었다.

어둔 房은 宇宙로 通하고  
하늘에선가 소리처럼 바람이 불어온다.

(一九四一・九)

to tarün ko:hyang

ko:hyang-e toraon nal pame  
nae pægori tarawa hanbange nuetta.

ædun paŋjün u:dzuro toyhago  
hanüresanga soritšaram parami pu:raonda.

어둠 속에서 곱게 風化作用하는

白骨을 들여다 보며

눈물 짓는 것이 내가 우는 것이냐

白骨이 우는 것이냐

아름다운 魂이 우는 것이냐

志操 높은 개는

밤을 새워 어둠을 짓는다.

어둠을 짓는 개는

나를 쫓는 것일게다.

가자 가자

쫓기우는 사람처럼 가자

白骨 몰래

아름다운 또 다른 故郷에 가자.

△一九四一·九△

ædum so:gesæ ko:pke p̄n̄hwatsagyo:ŋhanün  
p̄gorül türyæda bomya  
nunmul t̄sinnün gæsi næga u:nün gæsinya  
p̄gori u:nün gæsinya  
arüm̄daun honi u:nün gæsinya

t̄sidzo nop̄ün Kæ:nün  
pamül sæwæ ædumül t̄si:nnunda.

ædumül t̄si:nnün Kæ:nün  
narül t̄sonnün gæsil̄keda.

kadza kadza  
t̄sotkiunün saram̄t̄sram̄ kadza

pægol mo:l̄ræ  
arüm̄daun to tarün ko:hyæje kadza.

道

なくしてしまつたのです。

何をどこでなくしたか判らない

両手でポケットをさぐり

道に進んでゆきます。

石と石と石が果てしなくつづき

道は石垣に沿ってゆきます。

扉は鉄門を堅く閉ざし

道の上に長い影を垂らして

道は朝から夕方まで

夕方から朝まで通じていました。

石垣をたどり涙ぐむ

見上げると空は恥かしげに青い。

草一株ないこの道を歩くのは  
塀の向う側に私が残っているため、

私が生きるのは、ただ、  
なくしたものをさがすためです。

(一九四一・九・三一)

길

잃어 버렸습니다。

무얼 어디다 잃었는지 몰라

두 손이 주머니를 더듬어

길게 나아갑니다。

돌과 돌과 돌의 끝없이 연달아

길은 돌담을 끼고 갑니다。

kil

ira barysümnida,  
muəl ədida irənnündzi molra  
tu: soni tsumənistül tədümə  
kilge naagamnida.

to:lgwa to:lgwa to:ri kütə:psi yəndərə  
kirün toldamül kigo kamnida.

답은 쇠문을 굳게 닫어

길우에 긴 그림자를 드리우고

길은 아침에서 저녁으로

저녁에서 아침으로 통했습니다.

돌담을 더듬어 눈물 짓다

쳐다보면 하늘은 부끄럽게 푸릅니다.

풀 한 포기 없는 이 길은 걷는 것은

담 저쪽에 내가 남어 있는 까닭이고,

내가 사는 것은, 다만,

잃은 것을 찾는 까닭입니다.

〈一九四一·九·三二〉

tamün sōmunül kutke tade  
kirue kin kürimdzarül türüngo

kirün atšimesa tšönyögüro  
tšönyagesa atšimüro toghæsumnida.

toldamül tädüma nunmul tšitta  
tšy:dabomyän hanürün puküratke purümnida.

pul hanpogi ännün i kirül kə:nnün gäsün  
tam tšätšoge næga namä innün kadalgigo,

næga sanün gäsün, ta:man,  
irün gäsül tšänün kadalgimnida.